



目次:

- 1) リベラルアーツ教育のための新しいファカルティ・ディベロップメント・プログラム 1
- 2) FD 活動レポート
 - (1) オックスフォード大学 EMI プログラムに参加して 7
 - (2) 教育改革 ICT 戦略大会参加報告 9
 - (3) 2017 NACADA International Conference 報告 11
- 3) 学修・教育支援
 - チュートリアル実践報告 13
- 4) セミナー研修レポート
 - 理工学分野の教員向け Global Liberal Arts Alliance Workshop の報告 15
- 5) 役立つ ICT ツール
 - iJapan: 反転授業、インタラクティブな学習方法および日本研究 17
- 6) 新任教員紹介 19
- 7) 編集後記 22

リベラルアーツ教育のための 新しいファカルティ・ディベロップメント・プログラム

鄭 仁星

教育学・言語教育デパートメント

背景

米国発祥のファカルティ・ディベロップメント (以下 FD) は、1990 年代後期に日本に紹介され、2007 年にその重要性が大学設置基準で強調されたことをきっかけに、日本政府からも正式に推進されることになりました (Yuan and Shimizu, 2007)。多くの研究において FD プログラムが、学生満足度 (Shea, et al. 2003)、学生の成績 (Naeem, van der Vleuten, an Alfaris 2012) および教員のウェルビーイング (Jung, Nishimura, and Sasao 2016) に良い影響を与えることが明らかにされています。

また Baker, Lunsford、および Pifer (2015) は、リベラルアーツ大学の教員には、組織のミッションや教員本人のニーズを反映する特別な FD トレーニングが必要だと述べています。特に学部教育が最も重要とされる小規模のリベラルアーツ大学では、大規模な研究大学でトレーニングを受けてきた新任教員に対してオリエンテーションプログラムを実施することが不可欠です。多くの教員が研究志向である東アジアでは特に、リベラルアーツ教育における指導方法を理解することに苦しむ

教員は後を絶ちません (Jung, Nishimura, and Sasao 2016)。

FD プログラムは、革新的な教授方法や ICT 活用の分野で特にその必要性が増していますが、日本における導入率は依然として横ばいで (Taguchi et al. 2006) これは ICU も例外ではありませんでした。ICU では、2016 年に新任教員、講師、およびその他の教職員に対して着任直後に数時間の FD プログラムを実施しました。プログラムでは、大学のルールや規制、そして教員の職務と責任についての説明がなされましたが、リベラルアーツの価値を高めるための効果的な教授方略や、その革新的な手法・技術については網羅しきれていませんでした。ICU の教員向けに行われた最近のアンケートによると、教員たちは ICU の国際的なリベラルアーツカリキュラムに強く賛成しつつも、担当している授業ではそれを組み込めていないことが明らかになっています (Jung, et al. 2016)。このミスマッチの原因は明らかに適切な指導力の欠如であり、結果として、FD の需要と現状との間には大きな溝が生まれてしまったのです。そのため、FD プログラム (特に新任教員向け) を

設計し、早急に実施することが必要でした。

プログラム実施概要

ICU におけるこの新しい FD のニーズに取り組むため、IERS (Institute for Educational Research and Service) のメンバー (鄭 仁星教授、笹尾 敏明教授、西村 幹子教授、キム・アレン教授、および教育プログラム/心理学プログラムのリサーチアシスタント) からなるチームは、リベラルアーツ教育のための FD プログラムの設計、実装、評価を目的としたプロジェクトを ICU からのマッチングファンドを利用して United Board へ提案し、2年間の資金援助を受けました。

目的: 新しい FD プログラムでは、参加者が1) 担当分野に関連する形でリベラルアーツ教育の本質的な価値をより深く理解すること、2) シラバス作成の際に、リベラルアーツ教育の革新的な教授方法と技術を統合する体系的なインストラクショナルデザインモデルを適用すること、3) 職務上の責任 (指導、研究、交流や実務) を果たすことと小規模なリベラルアーツ大学で働く上でのウェルビーイングを明確にし、かつバランスを取ることが目的としています。

コンテンツモジュール: 上記の目標を達成するため、ICU コミュニティの皆さんにご回答いただいたニーズアセスメントの結果に基づいて、20種類のモジュールからなる新しい FD プログラムを作成しました。この20種類のモジュールは、Rモジュール5種類、Iモジュール5種類、Tモジュール10種類で構成されています。

R (Reception) モジュールは、担当者が新任教員をオフィスに招待し、歓迎の言葉を贈り、オフィスの主な役割を説明するセッションです。学長、VPAA、CLA Dean、GS Dean、Center for Teaching and Learning、図書館、特別学修支援、および Center for Research Planning and Service のオフィスが R モジュールを担当しました。



R モジュール : Center for Teaching and Learning (2017. 9. 26)

I (Information) モジュールは、様々なオフィスの役割、教員の業務、昇進および在職期間、教育効果、教員サポート、学生カウンセリング、人権、およびその他の ICU のルールや規制について担当者や事務職員が説明するセッションです。



I モジュール : ICU の学生とカウンセリング (2017.10.17)

T (Teaching) モジュールは、ICU のリベラルアーツ教育の価値、および様々な教授方略について議論するセッションです。T モジュールでは、ICU の歴史とミッション、教授方略、コミュニケーション、革新的なメディアやテクノロジー、およびシラバスの作成などを取り扱います。批判的・創造的思考力、問題解決、倫理的および道徳的アプローチ、コミュニティサービスなどといったリベラルアーツ教育における重要な価値を踏まえた上で、効果的かつ魅力的な教授方略を強調します。T モジュールはまた、英語でのコミュニケーションや、革新的な手法とテクノロジーの統合 (Moodle、Google のツール、アクティブラーニング、オープン教育リソース (OER)、反転授業など) を活用して、新任教員や教職員をサポートすることを重視しています。

T モジュールのコンテンツの大部分はオープン教育リソース (OER) として提供される予定であり、アジア内外のリベラルアーツ大学またはリベラルアーツプログラム、および UB のメンバーは、T モジュールのウェブサイトやモバイルコンテンツを改訂して再利用することができます。



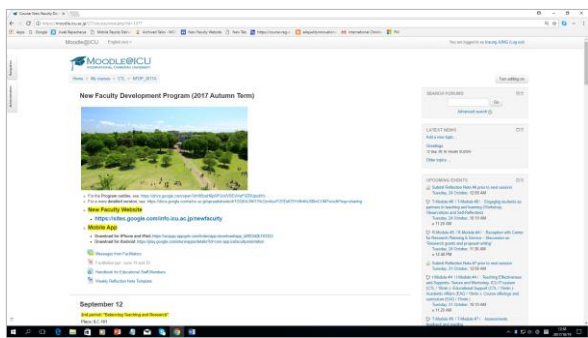
T モジュール : キリスト教についてのディスカッション (2017.9. 19)

配信方式：新任教員がそれぞれ任意のタイミングで様々な FD リソースにアクセスできるよう、1) 混合（Moodle システムでサポートされている対面式（f2f）のセッション）、2) オンライン（新任教員専用のウェブサイト。文書形式や動画形式のリソースが掲載されている）、3) モバイル（テキスト、音声、動画、およびウェブサイト上の教材を提供するモバイルアプリ）の 3 種類の方法が採用されています。

ブレンDED型：10 週間にわたって 20 回の f2f セッションを行い、Moodle を使用して資料の掲載、ファシリテーターへのメッセージやリマインダーの送信、および参加者の振り返りノートのアップロードを行いました。各セッションには 1 名以上のファシリテーター（経験豊富な ICU の教職員）が割り当てられ、小グループでのディスカッションやアクティビティをリードします。



テクノロジーおよび反転教育についての対面セッション（2017.10.17）



新しい FD プログラムのための Moodle コース

オンライン型：新任教員専用ウェブサイト (<https://sites.google.com/info.icu.ac.jp/newfaculty>) を通じて FD プログラムのセッションファシリテーターや新任教員のための様々な資料を提供しており、そのコンテンツの大部分は、クリエイティブコモンズのライセンスを通じて公開されています。図 1 に示すウェブサイトでは、すべての指導リソースおよび学習リソースを Web ページ、電子書籍、および pdf ファイル形式で掲載しており、教育支援、研究支援、事務手続き関連のリソースにグループ化されています。



図 1. 新任教員専用ウェブサイトのフロントページ

モバイル型：アンドロイドと iOS モバイルデバイスで使用可能なモバイルアプリを開発しています。図 2 に示すモバイルアプリには「Audio（音声）」や「Videos（動画）」などの機能が含まれ、新任教員専用ウェブサイトに掲載されている記事や動画の音声版が利用できます。

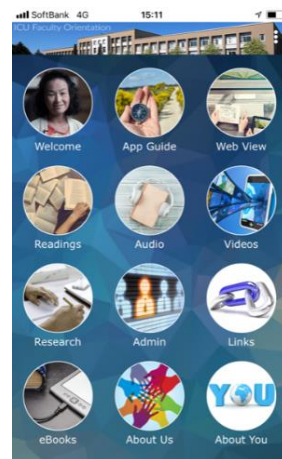


図 2. モバイルアプリのフロントページ

プロジェクト手順

今回新しい FD プログラムを開発するにあたって、プロジェクトチームは ADDIE モデルという、分析、設計、開発、実装、評価・改訂のサイクルを体系的に回すことができる、マクロのインストラクショナルデザインモデルを採用しました。本プロジェクトの1年目（2016年7月1日～2017年6月30日）では、この分析、設計、開発活動が完了し、2年目（2017年7月1日～2018年6月30日）である現在は、実装と評価・改訂に関する活動を行っています。

分析ステージ：新しい FD プログラム特有のニーズを把握するために、ニーズアセスメントを実施しました。プログラム内容や形式に対する特定のニーズは、ICU の経験豊富な新任の教員、事務職員、およびポリシーメーカーへのアンケートや個人・フォーカスグループインタビュー（FGI）を通じて確立していきました。

設計ステージ：コンテンツ、教材、アクティビティ、戦略、メディア/技術、オンラインおよびモバイルコンポーネントを含むプログラムの詳細を設計しました。このような細かい設計は ICU の教員や職員、およびプロジェクト内外の評価担当者によってレビューが行われ、提供されたコメントに基づいて改善していきました。

開発ステージ：CTL の協力の下、ブレンデッド (Moodle コンポーネントを活用した対面式セッション)、オンライン (新任教員専用ウェブサイト)、およびモバイルアプリを開発しました。ここでは ICU の教員や職員、およびプロジェクト内外の評価担当者のコメントに基づいて、改訂を複数回行いました。

実施ステージ：2017 年秋学期にこの新しい FD プログラムを 5 名の新任教員に対して実施し、またいくつかのセッションでは参加を希望する教職員を招待して実施を行いました。CTL は、改訂された新しい FD プログラムを2018 年の春学期から再度実施する予定です。

評価・改訂ステージ：CTL の協力の下、プロジェクト結果の評価、目標の達成度合いの把握、プログラムの弱点と強みの特定を行い、評価結果に基づいてプログラム内容を改訂する予定です。実施期間中、プロジェクトチームは次の 6 種類の評価データを収集し、これらには1) チームメンバー (セッションごとに少なくとも 2 人) による観察メモ、2) 各セッションのビデオ録画、3) 参加者による毎週の振り返りノート、4) プログラム終了時に配るアンケート、5) FD プログラムの開始時と終了時に行う、メンターによる CLA 新任教員の授業の観察記録、および 6) 新任教員およびセッションファシリテーターとの最終インタビューが含まれます。データは、この新しい FD プログラムの改訂および改善に使用されます。

振り返りと今後の予定

現時点での評価について：プロジェクトのチームメンバーによる観察記録、および 5 人の参加者の振り返りノートによると、2017 年秋学期に行った新しい FD プログラムのセッションファシリテーターは、反転授業型 (参加者は、各セッションの前にウェブサイトとモバイルアプリから関連する教材を読み、f2f セッション中はディスカッションや Q&A を行う) のプログラムを通じて新任教員の方々と論理や実務経験の知識を共有することができました。さらに、活発なディスカッション

セッションやツアー形式のセッションは、対話性、より深い思考、そして体験的学習を促進するため、参加者にとって特に魅力的であることがわかりました。参加者はまた、キリスト教、リベラルアーツ教育、テクノロジー、およびバイリンガル教育を自分の担当する授業にどのように適用できるか、といった実用的なディスカッションも楽しみました。ウェブサイトやモバイルリソースについては、主にウェブサイトのオンライン学習教材のアクセスのしやすさを高く評価していました。改善点としては、1) 各 T モジュールセッションに、実用的な例や経験に基づくディスカッションをより多く含めること、2) 日本語での理解が難しい参加者向けの翻訳や多言語で利用できるサービスを提供すること (一部のセッション)、および 3) オンライン学習教材の復習時間や、内容に関する質問を受け付ける時間を設けることが挙げられます。

今後の予定：プロジェクトチームは、この新しい FD プログラムの初回 (2017 年の秋学期) のデータを分析した上で強化・改善すべき領域を特定し、2018 年 6 月末までにプログラムを改訂する予定です。また、改訂されたウェブサイトおよびモバイルコンテンツは、OER として公開されます。CTL はプロジェクト終了後も引き続きプログラムを改善し、改訂は毎年実施される予定です。今後これらのリソースが ICU やその他のリベラルアーツ大学の新任教員にとって、大学の重要な価値基準に沿うリベラルアーツ教育や教授方略をより深く理解することに役立つことが期待されます。

参考文献

Baker, V. L., Lunsford, L. G., & Pifer, M. J. (2015). Systems alignment for comprehensive faculty development in liberal arts colleges. *To Improve the Academy*, 34, 91-116. doi:10.1002/tia2.20029

Jung, I., Nishimura, M., & Sasao, T. (2016). *Liberal arts education and colleges in East Asia: Possibilities and challenges in the global age*. Singapore: Springer.

Naeem, N., van der Vleuten, C., & Alfari, E. A. (2012). Faculty development on item writing substantially improves item quality. *Advances in Health Sciences Education*, 17(3), 369-376.

Shea, P. J., Fredericksen, E. E., Pickett, A. M., & Pelz E. W. (2003). Faculty development, student satisfaction, and reported learning in the SUNY learning network. In T. M. Duffy, & J.R. Kirkely (Eds.), *Learner-centered theory and practice in distance education: Cases from higher education* (pp.343-377). New York and London: Routledge.

Taguchi, M., Nishimori, T., Shinto, T., Nakamura, A., & Nakahara, J. (2006). The current situation of FD for junior faculty in the tertiary educational institutions. *Japan Journal of Educational Technology*, 30(1), 19-28.

Yuan, F., & Shimizu, Y. (2007). Faculty development and media use: Case studies of four American institutions and their implication to Japan. *Journal of Multimedia Aided Education Research*, 4(1), 19-30.

(日本語訳 : CTL)

FD 活動レポート (1)

オックスフォード大学 EMIプログラムに参加して

峰島 知芳

自然科学部門

自然科学部門の峰島です。この夏、オックスフォード大学での EMI (English Medium Instruction) Course for University Lecturers プログラムに参加させていただきました。このような機会をいただきまして、大変に感謝しております。

このプログラムは 2017 年 8 月に 5 日間かけて行われまして、Oxford EMI Training の Director of English Medium Instruction である、Dr. Julie Dearden 氏と、EMI Consultant and Senior Trainer の Tom Spain 氏に教えていただきました。このコースは、文学、政治学、生物、化学などすべての教科を英語で教える大学の教員 (content lecturer) の為に、有効な教授法を教えていただくコースでした。世界中の大学で、学生・教員の第一言語が英語でない環境での EMI は爆発的に増えているとのこと。Dearden 氏は、この現象を 'Pandemic (広域に広がる深刻な感染症の大流行)' と表現しておられました。否定的な意味を含むこの表現を用いられたことに、参加者は皆、少なからず驚いていました。Dearden 氏は教科を英語で教えることのアドバンテージと共に、ディスアドバンテージを紹介され、それをよく理解した上で EMI を選択する必要があるとのメッセージを発信しておられました。そして、その上で、より効果的に EMI を行っていく為の教授法を Spain 氏と共に多数紹介してくださいました。Dearden 氏の報告書は Reference をご覧ください。

それでは、プログラムの内容をご紹介しますと思います。

まずは、世界中の大学の EMI の状況を紹介していただき、EMI にすると、どのように教え方を変える必要があるかについて説明がありました。英語で教科を教える場合、内容 (content) そのものが難しく、また、英語も難しいという 2 つの山があります。その為、学生の理解が追い付いていない可能性が高く、学生の理解度を頻りにチェック (collect evidence of understanding) する必要があるそうです。その為の方法として、学生に質問を投げかけ、答えてもらうという方法が最も一般的だと思います。しかし、英語で行う場合、先生の質問の意味が分からない可能性、学生が頭の中

で、英語から母語に翻訳する時間、頭で考える時間、答えを母語で作る時間、それを英語に翻訳する時間が必要で、先生が質問をしてから、かなり待つ必要があります。その為、先生方には意識して、3 秒数えていただく必要があるそうです (One elephant, two elephants, three elephants と心の中で唱えると、丁度 3 秒だそうです)。また、学生が英語で答えるには、心理的なバリアもあります。答えが間違えている不安に加え、英語が間違えている不安、また、皆の前で話すという緊張感があります。その為に有効なのは、ペアワーク、または、グループワークです。グループワークの後に、答えてもらうと、答えは、'We think...!', 「私達は、、、」という回答の仕方になるので、学生にとっての心理的ハードルが下がります。また、グループワークの最中に歩き回って、学生の会話をよく聞くと、どの程度理解しているのか、どこでつまづいているのか、学生の理解度について情報を得ることができます。このようにして、evidence of understanding を集めることが必要不可欠とのことでした。授業中に行うことのできる、様々なグループワークの形、質問の仕方について、多数ご紹介いただきましたので、詳しくお知りになりたい方は、峰島までご連絡ください。



ワークショップ会場側の川とカフェ

さて、英語で教科を教える際に、学生のコミュニケーション能力を伸ばしたいならば、学生に発話する機会を多く与えることが必要とのこと。多くの国で、学生は、授業中にしか英語を練習する機会がない状況だからです。日本も同様だと思います。限られた時間で、カバーしなければならない授業内容が多い場合に、学生の答えを待

つ暇がなく、先生自身で答えてしまうことが非常に多くあるそうなのですが、そこは我慢と工夫が求められます。

また、学生の理解度をチェックする為に、学生が話しやすい環境を作ることが大切ですが、その為の方法として、オンラインクイズの Kahoot! をご紹介いただきました。

Kahoot! を行う際には、ペアをつくること、グループ名は実名を使わないこと、面白い息抜き問題も混ぜることによって、学生が参加しやすく、匿名なので間違えが怖くなくなり、また、順位を必要以上に気にして萎縮することなく、自身の意見を表明できるというヒントをいただきました。

さらに、インタラクティブなクラスを促進、学生の学びをスムーズにするためにも、フィードバックの仕方についても教えていただきました。基本は褒めるのを 7 割、指摘は 3 割で行うということです。コメントは褒め言葉で始めて、2 つ 3 つ褒めたあとに、1 つ、より向上できる点を述べ、最後は、ポジティブなコメントで相手を褒めて終えるということです。こうすることで、学生は次回も参加してくれる気持ちになりますし、指摘事項を受け入れやすくなります。褒め言葉の英語表現についても教えていただきました。

次に、先生が使うべき英語について講義がありました。その際に、重要なのは、生徒の英語のレベルを把握することです。The Europass Language Passport (<http://europass.cedefop.europa.eu/documents/european-skills-passport/language-passport/templates-instructions>) というものをご紹介いただきました。これは、自分の英語のレベルを、understanding, speaking, writing について 6 段階で評価するものです。ただ、自分自身については低く評価しがちであるので、その点については注意が必要とのことです。これに加え、実際には、学生の英語のレベルは、授業をしながら把握していくことになると思いますが、授業の中で話すスピード落としたり、同じことを違う言い方で説明したり、また、難しい言葉は使わず、簡単な言葉で言い換えるといった工夫が必要とのことです。

このコースは全体を通してインタラクティブで、我々参加者もお互いに英語で内容 (content) を教え合いました。教える相手は他大学の先生ということになります。あるエクササイズで、Naming word, Process Word, Concept word の 3 つを時間内に簡単に相手に説明し、その後、相手に理解した内容を説明してもらうものがありました。各々のグループで相手の理解は驚く程低く、教室には笑い声が上がりました。大学教員程度の知性があり、このワークショップに出ている程度のやる気のある聴衆でも、第二言語で新しいことを理解

するのは、非常に難しいというのを体感した瞬間でした。したがって、学生の理解度を確認すること、つまり、evidence of understanding を集めることが、本当に大切であるということを実感しました。



オックスフォードの町並み

さて、もう一つ感じたことは、学生の理解度を確かめるため、Evidence of understanding を集めようと、授業をインタラクティブにすると、授業の進度がどうしても遅くなるということです。この件について質問をすると、'It's not about what we teach, it's about what THEY learn.' という答えが返ってきました。カバーしなければならない内容を急いでカバーしても、学生の理解度が 10%程度であるならば、それはあまり意味がないかもしれない。カバーできる内容を減らしても、学生の理解度を上げたほうがよいという考え方です。

ただ、授業でカバーできなかった部分を、学生に読んできてもらうなどの宿題を出すという選択肢もあるとのことです。その時のコツとして、

- ・宿題を出す際に、段落ごと、ページごとに読む箇所を学生ごとに割り振って、次の授業の時にディスカッションをする」ようにすると、学生にはその段落を説明するという役割が生まれるので読んでくる可能性が高くなるそうです。

- ・また、「予め理解してほしいポイントを、質問形式で示しておいて、次の時にディスカッションをする」とやはり、読んできてくれる率は高くなるそうです。その際、面白い質問であればあるほど、学生は熱心に読んできてくれるとのことです。

- ・学生に順番で Kahoot! などでクイズを作ってもらって、次の時に reading assignment についてクイズをするのも一つの方法であるとのことです。EMI にすると、与えるべきサポートが増えるので、どうしても教師の仕事は増えがちですが、全部自分でやる必要はなく、学生にクイズを作ってもらうなど、積極的に学生さんと一緒に授業を作り上げていくべきだとの言葉でした。目的は学生が学ぶことであって、どのように学ぶかは(先生がクイズを作るか、学生がクイズを作るか)といったことは、あまり重要なことではないとのことでした。

Reading assignment について注意しなければならないのは、あまり現実的でない分量の reading assignment を出さないことです。英語が第二言語の学生で、一語一句辞書をひかなければならないような場合、1 ページでも多いかもしれません。現実的に無理な reading assignment を出すと、結局やってこない場合が多くなるそうです。その場合、word glossary を先に渡したり、アウトラインを渡したり、前後を説明して読む部分を 1、2 段落程度に抑えるなどの工夫が必要とのことです。学生のレベルを把握するのが、ここでも必要です。

最後にご提案されていたのは、ESL teacher (English teacher) と content teacher の協力の可能性です。教える内容は違っても、教えている学生は共通ですので、ESL teacher が、content teacher のレクチャーを見て、難しすぎる語彙についてアドバイスをくださることもできるだろうし、逆に、content teacher のほうから、このような vocabulary を教えてほしいと ESL teacher をお願いするといったことが可能性として挙げられました。

このプログラムで、非常に多くのことを学ばせていただきました。英語で教えるためには、英語が流暢でないといけないのではないかと感じていましたが、Dearden 氏と Spain 氏によると、教育的なスキル(現場の運営能力もろもろ)によって、十分に素晴らしい授業はできるとのことです。むしろ、それには、やはり経験が必要なので、一朝一夕でできることではなさそうであるという印象を持ちました。ICU での good practice をお伺いするなど、学ばせていただく機会を模索したいと思いました。また、私のような英語が第二言語の教師が content を教える場合、学生はどこがわからないのか、自分自身も同様の経験しているの、アドバンテージになる場合もあるとの励ましの言葉をいただきました。同時に、ネイティブの先生が、学生に授業を教えていらっしゃる上でのご苦労も垣間見ることができました。

このプログラムで、世界の教育が EMI に急速に向かっていること、EMI を効果的にするには、教え方に工夫をしなければならないこと、工夫の具体的な方法など、多くのことを学ばせていただきました。このような機会を与えていただいたことに、深く感謝いたします。現地のオックスフォード大学で学ぶ ICU の卒業生が、アシスタントとして受講者をサポートしてくださったのですが、彼がとても優秀だったこともとても誇らしく感じました。この経験を通して学んだことを活かして、ICU の学生に、多くのことを学んだと自信を持って卒業してもらえるように、授業を頑張りたいと思います。

Reference

Julie Dearden, English as a medium of instruction –a growing global phenomenon, British Council, 2014,
<https://www.teachingenglish.org.uk/article/english-a-medium-instruction-%E2%80%93-a-growing-global-phenomenon> (2017. 10. 14 アクセス).

FD 活動レポート (2)

教育改革 ICT 戦略大会参加報告

一澤 真紀

学修・教育センター

2017年9月5日～7日に私立大学情報教育協会主催の教育改革ICT戦略大会が開催された。私は5日の全体会、6日の分科会Bに参加し、また「分科会C：学修ポートフォリオシステム活用・構築のガイドラインと大学での活用状況と課題」ではICUでの活用事例として主にアカデミックプランニング・エッセイについて紹介する機会を得た。以下、5日の全体会と6日の分科会B、Cの一部概要を報告する。

5日の全体会で最も印象的だったのは、筑波大学の金子元久大学研究センター特命教授が、情報の役割は、自分の立場をよく知るために利用することであり、情報のみに注目すると肥大化してしまうこと、一定の方向性、前提や仮定、ある種の「思い込み」をもって使う必要があると指摘していたことである。私たちはともすれば情報収集にばかり邁進しがちだが、情報を使って何を知りたいのか、ということを考えないかぎり、情報そのものにはあまり価値がないのではないかと感じた。

関西国際大学の濱名篤学長は、関西国際大学の教育システムを紹介していたが、ひとつ特徴的だと感じたのが「リフレクション・デイ」という日を新しい学期が始まる前に設けていることで、この日は学生に答案やレポートが返却され、これを元に学生はアドバイザーと話し、振り返り結果や新たな目標をeポートフォリオに記録しているとのことだった。本学でもeポートフォリオと履修登録日の面談を関連付けることは可能性としてあるのではないだろうか。

東京都市大学の湯本雅恵副学長は、卒業時に発行されるディプロマ・サプリメントに加えて、各学年の終了時にも発行されるプレ・ディプロマサプリメントについて紹介していたが、興味深かったのは、成績情報としてGPA(Grade Point Average)ではなく、GP Sum、成績の積算を利用している点だった。平均を利用すると、どうしても成績の低い方に偏ってしまうため、加算していく方が学生のモチベーションが保てる、という理由とのことだったが、ICUでも成績不良の学生のモチベーション向上に、こういった工夫を取り入れられたらよいのではと感じた。

9月6日のテーマ別意見交流の分科会B「学修成果可視化に向けたIRの取り組みと課題」では、早稲田大学、大阪府立大学、上智大学が事例発表を行った。

早稲田大学の姉川恭子先生からは、早稲田大学でのIRの取り組みについて紹介があった。早稲田大学では30代、40代の中堅職員を集めてIR担当者連絡会を月1回実施している。各部署から事例報告をしてもらうことで、現在行われている業務の中でIRと言えるものを発見する、部署間で情報共有することなどが目的である。

大阪府立大学の畑野快先生からは、主に教学IRの取り組みについて発表があった。大阪府立大学においてPDCAサイクルの「C」として実施している学生調査とeポートフォリオ、それぞれの意義と課題として、学生調査については、自己点検・評価、認証評価に対するエビデンスを提供できる一方、具体的な教育改善活動に活かすにくいこと、eポートフォリオについては、個々の授業についての学びの履歴を残すことができる一方、学びの履歴を残すことの意義が学生に伝わりにくい（1年後期で入力率が10%前後まで落ち込む）こと、教員によって使用に差があることなどの課題が挙げられていた。eポートフォリオは非常にできていて感じたが、仕組みを整えることは出来ても、意味があると学生自身が感じなければ、あまり利用されず、結果としてエビデンスとしてもあまり有効でなくなってしまう。仕組みを導入し、更に定着させることの難しさを感じた。

3大学とも、全学的にIRを行う場合人材不足、教職員の理解を得ること、様々な形式のデータをIRに利用できるよう整えることなどに苦労している点が共通していると感じた。

6日午後の分科会Cでは、私立大学情報教育協会の大学情報システム研究委員会が2017年5月に発表した「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」を元に、委員会の委員長である帝塚山大学の岩井洋先生から内容についての説明があり、続いて昭和大学、奈良教育大学、ICUが活用事例報告を行った。会場には130人以上が集まり、このテーマに関する関心の高さを伺わせた。

岩井先生は、学修ポートフォリオをめぐる状況

(問題点)として、ポートフォリオの意義、目的およびメリットが理解されていないこと、学修成果の書き込みが継続されず、効果的な学修方法が身につけていないこと、ポートフォリオに記載した学修内容の真実性を、教員が判断することが困難であること、教育改善のためポートフォリオをどのように活用すべきか理解されていない、財政的支援、設備、人的資源の不足などを挙げていた。

続いて昭和大学、奈良教育大学の事例報告があり、私はICUの事例報告としてicuMAPの概要説明と、アカデミックプランニング・エッセイについて報告した。アカデミックプランニング・エッセイは、学部生が入学前から卒業時まで、合計5回icuMAP(ウェブ)上で提出、蓄積していくものである。英語150語程度で自由記述、5回のうち3回は手続き上入力を必須としているため、高い提出率となっている。内容は、入学前はICUでの学びの目標、メジャー選択時はメジャー選択の理由、卒業研究指導教員申請エッセイでは卒業研究のテーマや進路選択についてなどで、長期的な学修の展望、および振り返り等に利用することができ、エッセイは教員も確認、コメントをすることが可能である。課題としては、授業、コース単位での学修計画ではないため、到達度が測りにくいこと、またフリーテキストによる入力のため、自由度が高い反面、分析などが難しいことを挙げた。

質疑応答では、学修ポートフォリオに教員のコメントは必要なのか、学生に入力させるだけでよいのでは、という質問があった。岩井先生が強調していたのが、教員が速やかにコメントなどのフィードバックをすることが、学修ポートフォリオの継続的な利用を左右するという点である。長文のコメントを書く必要はなく、スタンプ機能をつけている大学もあるとのことだった。(ICUのエッセイにも、教員がエッセイを読んだ際にボタンをクリックすれば、学生のコメント欄にその旨が書き込まれる「Read」ボタンがあるので、是非活用してもらいたい)

また、学生の「やらされてる感」をなくすため、教員がサポートしている、という姿勢を見せることが大事だという話があった。本学でも、卒業時エッセイと一緒に実施しているアンケートで、「エッセイをどのように使えばもっと有意義になると思いますか?」という設問に対する回答の選択肢の中では、「アドバイザーからコメントなどのフィードバックがある」を選んだ学生が多かったことから、教員からのコメント、フィードバックは学生のモチベーション向上につながると感じている。

今回様々な発表を聞き、本学での課題には、他大学と共通する課題も多いことが改めて確認できた。

本学でも取り入れることができる可能性を感じたものもあるので、今後何らかの形で生かしていきたい。

参考：平成29年度 教育改革 ICT 戦略大会に関するウェブサイト

<http://www.juce.jp/LINK/taikai/taikai2017.htm>

2017 NACADA International Conference 報告

大枝 さやか

アカデミックプランニング・センター

NACADA 国際大会の概要

NACADA (National Academic Advising Association) International Conference が 2017 年 7 月 10 日～13 日、英国シェフィールドにて行われました。NACADA は在米のアカデミック・アドヴァイジングの学会および職能団体で、主に米国内でカンファレンスや研修を行っています。近年 NACADA はグローバル展開に力を入れており、アドヴァイジングに携わる専門家のネットワークを国を超えて築き、世界規模でアドヴァイジングを推進しようとしています。Global Community for Academic Advising を合言葉に、2013 年から毎年米国外で国際大会を開催しています。今年の国際大会は "The Future of Academic Advising: Connecting and Consolidating Students' Experiences and Education." をテーマに行われ、英国、ヨーロッパ、米国など 19 カ国から 200 名を超える大学関係者が会場となったシェフィールド大学に集まりました。

仲間と出会う

初日にはプレカンファレンスワークショップが行われ、夕方からはネットワーキングの時間が設けられていました。NACADA のカンファレンスでは参加者同士の情報交換や経験の共有が重視されています。午前と午後にお茶の時間があったり、立食形式の昼食が提供されたり、リラックスした環境で仲間と出会い、友情を深める機会がたくさん組み込まれています。

2 日目の午前中には総会と基調講演がありました。基調講演は Dr. Mehvash Ali (American University of Sharjah in United Arab Emirates) が自身の学生時代から心理学者になるまでを振り返りながら、アドヴァイジングにまつわる様々な理論や概念を紹介するという、個性的なお話でした。NACADA では「学生の成功のために」という言葉をよく聞きますが、成功が意味するものは人それぞれであることを改めて認識しました。

英国のアドヴァイジング事情

英国におけるアドヴァイジング事情に関する報告もありました。英国では、アドヴァイジングの

主流は教員による personal tutoring であり、この方法が長年取られてきましたが、昨今は専門職によるアドヴァイジングが増えてきています。2 年前には英国版 NACADA とも言える UKAT (UK Advising and Tutoring) が立ち上げられ、北米外では初の NACADA の連携団体 (allied association) とのことでした。

High achiever 特有の問題について

2 日目の午後からは 4 日目にかけては、60 分の分科会が同時にいくつも開かれ、自分の興味があるところへ自由に参加するスタイルでした。私が参加した分科会のなかで特に印象深かったのは、Brigham Young University の Hayley Jensen 氏と Phillip Rash 氏による high achiever に関するプレゼンテーションでした。アドヴァイジングでは成績が振るわない、もしくは大学生活に適應できない学生の支援がテーマになることが圧倒的に多いのですが、成績優秀で一見問題がなさそうな学生 (high achiever) であっても、そうした学生特有の課題があり、アドヴァイザーの手助けが有益であるというのが新鮮でした。

まず high achiever の特徴として、成績優秀で学業に対するモチベーションは高いのですが、all or nothing の思考をしがちで、変化することへの抵抗感や失敗に対する恐怖心が大きいという説明がありました。従来のやり方でうまく行っている間はよいのですが、大学生になってやるべきことが増えたり、これまで自分が頼りにしてきたやり方が通用しなくなったりすると、助けを求めることができず燃え尽きてしまいます。学業が得意であることが自分を支えている面もあるため、その部分が脅かされると、アイデンティティの危機にも直面します。

このような high achiever に対してアドヴァイザーの介入は早い段階であるほど、また頻繁であるほどよいとされています。アドヴァイザーは彼らの努力を認め、失敗に対する過度の不安を和らげ、リスクをおかしても大丈夫なのだという気持ちにさせることが重要です。多くの場合 high achiever は、失敗は恥ずべきことであり、先生や周りの人たちを失望させるものだと捉えていま

す。そんな彼らに、失敗は学びの機会であるという成長のマインドセットを持たせることによって、挑戦を促し、さらなる成長を助けることができるのです。

成長のマインドセットの対極にあるのは、固定されたマインドセットです。固定されたマインドセットでは人の能力やスキルは生まれ持ったものとされ、失敗は自分の評価を下げるものであり避けるべきものとされます。一方、成長のマインドセットでは人は努力によって新しい能力を獲得できるとされ、失敗は一時的な後退に過ぎず、成長の糧と考えられています。

往々にして学生は限定された「成功」のイメージを思い描いていることがあり、アドヴァイザーは対話を通して、より総合的な（holistic）「成功」のイメージを学生が描けるよう導くことが大切という話もありました。

High achiever について詳しくご紹介しましたが、他にも、コーチングの要素を取り入れた会話のデモンストレーションを交えた分科会や、メンタルヘルスに問題を抱える学生のアドヴァイジングなど、幅広い内容に触れることができました。アドヴァイジングの場面で役立つのはもちろん、若者をより良く理解し効果的なコミュニケーションを取るという視点からも有意義なものでした。

最後に

NACADA のカンファレンスの特徴は、参加者の大多数がアカデミック・アドヴァイザーであり、セッションの多くが実践例の紹介を伴うことです。プレゼンターと参加者との距離が近く、参加者同士のコミュニケーションも活発です。共感し合ったり、アイデアを交換したり、非常に充実した時間を過ごすことができます。国や文化が違っても、似たような悩みを持ちながら日々努力している仲間がいることを実感し励まされます。

日本ではアカデミック・アドヴァイジングが一般的ではないので、国内の大学関係者と話しても同じレベルで知識やノウハウを交換することは難しいのが現実です。これからも NACADA に参加し、学んだことを生かして、アカデミックプランニング・センターの「常に最先端の理論と手法について見聞を広め、より高いアドヴァイジングの知識を習得する」「アドヴァイジングのナレッジを学内に広め、学生サポートに活用するとともに教員アドヴァイジングのサポートを行う」というミッションを果たしていきたいと思えます。

参考：NACADA (National Academic Advising Association) <https://www.nacada.ksu.edu/>

チュートリアル実践報告

学生の学修に繋がる教育活動の継続的な改善の推進としての取組み例として、「言語学入門 I でのチュートリアル」と「特別学修支援室でのチュートリアル」について報告する。

言語学入門 I でのチュートリアル

吉田智行

心理学・言語学部門

2017 年度の秋学期から、言語学メジャーの基礎科目「言語学入門 I」に、チューター制を試験的に導入している。今回は、学部 4 年生 2 人、大学院レベルの卒業生 2 人にチュートリアル・セッションを担当してもらっている。チューターの基本的な仕事は、(1) 授業に出席し授業内容を把握すること、(2) 授業内容と練習問題に関する質問に答えるチュートリアル・セッションを週に 15 時間以内で設定すること、(3) 週 1 回、担当教員とのミーティングに出席すること、などである。チュートリアル・セッションは、主に CTL オフィス内で行われるが、CTL のオフィスパワー外の時間帯には ILC のラウンジを使用している。履修生は、CTL の設定したシステムを使って、あらかじめチュートリアル・セッションの予約を取らなければならない。今回の「言語学入門 I」には 64 人が登録しており、多くの履修生によってチュートリアルが積極的に活用されている。

学部上級生によるチューター制は、アメリカのリベラルアーツ・カレッジでは導入しているところが多く、優秀な学部上級生が下級生の学修支援をすることによって、より高い学習効果をあげている。「言語学入門 I」にチューター制を試験的に導入した理由の 1 つには、授業についていくのが難しい学生を支援するということがある。これまでは、なんらかの理由でついていけなくなり、途中で諦めてしまう学生も少なくなかった。チューターの支援があれば、最後まで楽しくこのコースで学ぶことができるのではないかと期待したわけである。

現在、中間テストが終わったところであるが、チュートリアルの活用に一定のパターンが出てきている。第 1 に、中間テストで優秀な成績を修め

た学生の多くがチュートリアルの常連であること。第 2 に、優秀な学生たちの中には、チュートリアルを活用する頻度が高いだけでなく、高度な質問をする傾向があること。第 3 に、成績不良の学生のほとんどがチュートリアルを活用していないこと。このようなパターンは、ある程度予想できた部分もあるが、このままでは、途中で諦めてしまう学生の数を減らすことに貢献する可能性は低いと言わざるをえない。中間テストの結果を反省し、チュートリアルを活用する学生が増えてくれることを期待するとともに、学生の活用を促す方策を考えなければならない。

今回、チューター制を導入して最も良かった点はみんなで一緒に学ぶ雰囲気が出てきたことである。「言語学入門 I」は、毎年、言語学メジャーを目指す知的な好奇心の高い学生が履修するコースである。これまではチューターからの支援がなかったので、授業内容や宿題に関する質問は主に担当教員が受けていた。チューター制を導入してからは、学生にとって質問しやすい環境が確立され、基礎的な理解が深まり、より高度な質問につながるケースが増えたと感じる。チュートリアル・セッションで興味深い質問が出ると、チューターが担当教員に報告し、授業でほかの履修生たちと共有するということが頻繁に起こっている。これは、チューターにとっても良いことで、履修生とともにチューターも一緒に学び、学問の深さを理解することにつながっている。



言語学入門 I でのチュートリアルの様子

チューター制をうまく運営するには様々な条件をクリアしなければならない。中心的な役割を果たすチューターは、優秀であることはもちろんのこと、しっかりとした専門的な知識をもち、なおかつ後輩の学修支援に対して熱意がなくてはなら

ない。優秀な先輩が熱意をもってチュートリアルをしてくれるからこそ、履修生も高度な学びを目指そうとし、何度もチュートリアルを受けるようになる。授業内容の理解が深まれば、さらに高度なことを知りたがる。チューターはそれを歓迎し、より良いチュートリアルにつながっていく。そのような環境の中で、下級生の中にいずれは自分もチューターとして後輩の学修支援をしたいと考える学生が出てくれば、理想的な循環が生まれるのではないだろうか。また、宿題の出し方にも配慮が必要である。このコースでは4回に分けて練習問題（各回に5～10問）を課しているが、学期を通してバランス良く配分することによって、チュートリアルの活用にむらがなくなる。もちろん、チューター制を支える運営と管理を担当する職員との連携、担当教員のチューターとの連携、チューター同士の連携、なども重要な要因となる。

特別学修支援室でのチュートリアル

鈴木朋哉

学修・教育センター

2017年度の春学期より実施している特別学修支援室を利用している障がい学生へのチュートリアルの現状と課題について報告する。

チュートリアルは一人の利用者に対して週一回実施すること、一回のチュートリアルは一時間とすることを原則としている。初回のチュートリアルでは、利用者の学修状況を把握するため、学修・教育センターで作成した「[学修スキルに関する質問票](#)」への回答を求めている。「質問票」は、講義内容を理解する能力や、各種課題の処理能力に関して、自己評価を問う形式となっている。

利用者が抱えている学修上の困難は、その様態においても原因においても多様であるため、支援・指導は利用者のニーズに合わせて行われることになる。例えば、学修計画の策定・履行に困難を抱える学生に対しては、チューターが利用者とともに計画を策定し、履行状況を確認する作業を繰り返す。レポートを作成することが難しい学生に対しては、テーマ設定や議論の方針などについて相談に乗っている。書字に困難を有している利用者もおり、その場合は口頭で構想を述べてもらったものをチューターがアウトラインとして整理し、それを基に本人に論文を書いてもらう、ということも実践している。



特別学修支援室でのチュートリアルの様子

現在まで延べ13名がチュートリアルを利用し、そのうち8名程度が継続的な利用者である。利用の結果として単位取得・成績向上といった効果がみられたか否かに関しては利用者によって異なるが、継続利用者は概ねチュートリアルに意義を感じていることが伺える。

現在のところ、チュートリアルはチューター1名で対応している状態である。今後の課題としては、チューターの増員、チュートリアル方法に関する一定のマニュアル化、本サービスの学生への周知、などが挙げられる。

今回取り上げた2例、特定の科目に対して行う授業支援および学修につまずきを覚えている学生に対して行う学修支援は、支援対象や手法が異なっている。しかしながら、両者ともチュートリアルによる学修支援には潜在的ニーズがあり効果を上げていることが確認された事例である。

大学全体としてチュートリアルをどのように導入し拡大していくか今後も継続して検討していきたい。

理工学分野の教員向け Global Liberal Arts Alliance Workshop の報告

ジュリアン・コウ 自然科学部門
峰島 知芳 自然科学部門

内容：理工学分野の教員向け Global Liberal Arts Alliance Workshop

日時：2017年7月

開催場所：American College in Greece, Deree, ギリシャ



左から峰島先生とコウ先生

私たちは、ギリシャにある American College の Deree で開催された、Global Liberal Arts Alliance 主催の理工学分野の教員向けワークショップに参加しました。本ワークショップの目的は、リベラルアーツ大学の科学関連の教員たちによる国際的なコミュニティを構築することでした。コミュニティでは、科学分野のアイデアやリソースを共有したり、教育や学習に対する熱意を語り合いました。

ワークショップでは、次のようなテーマが取り上げられました。

1. カリキュラム作成における「逆向き」設計 (*Understanding by Design*、Wiggins および McTighe、Assn. for Supervision & Curriculum Development)
2. 学習目標の作成
3. 学習内容の評価と目標のすり合わせ
4. ルーブリックを使用した評価
5. リテラチャーディスカッションの計画 (現代の研究事例をもとに基本的概念を教える)
6. アクティブラーニングおよびエビデンスに基づいたプラクティス
7. アクションリサーチ - Scholarship of Teaching and Learning
8. 共同でのラーニングオブジェクト (LO) 作成

ワークショップでは、上記すべてのテーマをアクティブラーニングを通じて体験しました。参加者はアクティビティごとに異なるグループに分かれ、学習目標や評価用のルーブリックを作成し、さまざまなアクティビティを行います。また、リーダーの指導の下でリテラチャーディスカッションも行い、参加者自身でディスカッション用の質問やそれに付随する評価用のルーブリックを作成し、アクティビティを組み立てていきました。アクションリサーチは、周期表を利用するエクササイズを通じて体を動かしながら楽しく体験し、紹介を行った後に学習オブジェクトを各自で作成しました。

テーマ 1～4 と 6、および 8 については、一緒に取り上げます。ここで重要なのは、教育者はアクティビティやコースの内容を設計する前に、学生が学び、達成する必要がある目標を明確に設定すべきであるということです。明確な目標が定まって初めて、アクティビティや課題図書を選ぶ段階になります。次のステップは、課題の評価用のルーブリックの作成です。評価用のルーブリックがあると、学生達は指導者が課題に何を求めているのかを知ることができます。その結果、提出される課題の質が向上するため、ルーブリックの作成は指導者と学生の両方にとってメリットがあります。最後に、アクティビティと内容を組み合わせます。学習目標や評価用のルーブリックを作成するにあたって、ブルームの分類学における動詞について学びました。なんと、「...を理解する」というような動詞は使ってはいけません！（「理解する」というのは、外から評価できることではないため）ここで学んだことを活かし、「レスンプラン」および「ラーニングオブジェクト」(LO) を作成しました。レスンプランは、ある議題に関する 1、2 個のアクティビティごとに作成し、かつ明確な目標および評価が必要です。ラーニングオブジェクトとは、明確な学習目標、および教師・学生への指示と評価を含む小さなアクティビティを指します。これには、クラス内アクティビティ、問題集、宿題や試験問題、リテラチャーディスカッションなどが含まれます。

テーマ 5 は、リテラチャーディスカッションの計画を立てることでした。最初に、「Revisiting

“Is the scientific paper a fraud?” (Howitt および Wilson 著、EMBO reports、2014) という記事を読んだ後、リーダーが準備した質問に対する回答を作成しました。この際、評価用のルーブリックも作成しました。次に、各自で任意の論文を選び、質問とその回答、および評価用のルーブリックを作成しました。

テーマ 6 はアクションリサーチについてです。ここではアクティブラーニングの周期表エクササイズを行ったのですが、このエクササイズでは、各参加者に対して周期表の元素が割り当てられます。元素が割り当てられた参加者は、サイズ、電気陰性度、電荷などに応じてリーダーの指示に従って整列します。このエクササイズにより、周期表の理解を強め、また実際に身体を動かすことにより記憶をより強固にすることができます。コース作成エクササイズも体験しました。これはクラス内外を問わず、ある議題に対して学生が積極的に関わるよう促すことを目的としています。環境科学のクラスで例えると、コースを受講した結果、生徒が環境を気かけたり、実際に環境を保護するように行動を起こせるようなコース設計が望ましいと言えます。エクササイズとして、今回はそのような教案を作成しました。

また、次のようなアクションプランについても話し合いました。

9. 事務スタッフと話し合う（何を伝えるのか。どういった回答を求めているのか。）
10. 教案
11. 同僚と話す（科学分野の中外で）、所属している学科やプログラム内の人と話し合う
12. Trellis に参加するよう同僚に勧める
13. 一緒にワークショップに参加した人と話し合いの機会を設ける（学生が「専門家の意見を聞く」ことができるように、遠隔でクラスに参加できるように招待する）

とても密度の濃いワークショップで、今回は STEM 分野と、またリベラルアーツ大学にも焦点を当てていたもので、ここで得た知識はすぐにでも活用できる、とても意味のある内容でした。ご希望の方には、ワークショップでの学びを喜んで共有いたします。また、ICU が指導方法の面でどのように活動できているかを知るよい機会でもありました。ICU は、分野によってはとても進んでいますが、まだまだ伸びしろがある分野もあると感じています。

ミーティングで共有された STEM 教育へのリンク集を以下に記載します。ぜひご活用ください。

コミュニティによる実践例

1. CAE: Improving Astronomy Education: <https://groups.yahoo.com/neo/groups/astrolmer/info>
2. Faculty for Undergraduate Neuroscience: funfaculty.org (Harry Itagaki)
3. EREN: Ecological Research as Education Network - <http://erenweb.org/>
2010年5月、私たちのグループはこの5年間のプロジェクトに対して、アメリカ国立科学財団の Research Coordination Networks (学部生物学教育) プログラムから 495,000 ドルの助成金を授与されました。
4. NASA Astrobiology Institute: <https://astrobiology.nasa.gov/education/>
5. Analytical Sciences Digital Library : <http://home.asdlib.org/> (分析化学) (主催者)
6. IONiC: <http://home.asdlib.org/> (無機化学) (主催者)
7. SERC (地球科学、他) : <https://serc.carleton.edu/index.html> (主催者)
8. Project Kaleidoscope (STEM) : <https://www.aacu.org/pkal>
9. Network for Integrating Bioinformatics into Life Science Education (NIBLSE) : niblse.org
EREN と同様に、[NSF-RCN](http://www.nsf.gov/) からの5年間分の助成金の支援のもと活動しています。
10. BioQUEST bioquest.org (問題提起、問題解決、説得技術) BioQUEST の活動内容の1つ (詳細は SERC サイトにて) は、クリエイティブな「調査事例」です。

Visible Teaching へのリンク (主催者) :

<http://dx.doi.org/10.1021/ed800104t>

Timer Cube :

<https://www.datexx.com/product-p/df-33.htm>

Dance Your Thesis (through

Science): <http://www.sciencemag.org/news/2016/10/and-winner-year-s-dance-your-phd-contest>

(日本語訳 : CTL)

iJapan : 反転授業、インタラクティブな学習方法および日本研究

ボンディー・クリストファー
社会・文化・メディア部門

私は毎年、日本研究のコーディネーターとして「日本研究概論 (JPS101)」というコースを教えています。このコースは、常に課題を与えてくれる学際的なコースであるため、リベラルアーツ教育機関として ICU が掲げる目標にとっても上手く合っていると思います。ただそれと同時に、10 週間で日本の奥深さや幅広さを学生と共有することも難しくなっています。学生の知識の幅を広げ、かつ日本に対する興味を刺激するため、私は教授アプローチとして、また学生と関わっていく方法として、テクノロジーを活用することにしました。今回の試みは、iBooks と PechaKucha プレゼンテーションという、大きく分けて 2 つの方法で行っています。

通常、学生の成果物のやり取りは、教師と学生間の、ある意味閉鎖的な関係の中で行われます。これは、学生がレポートを書き、提出した後は、教師がコメント付きのレポートを直接学生に返却するということを指します。これに対処するため、私の「日本研究概論」では、学生同士や私、さらにはより広範なコミュニティへ共有される文章を執筆するというアサイメントを出しました。学生が作成した文書は iBooks としてまとめられ、その後一般に向けて「公開」されます (<https://www.apple.com/jp/ibooks/>)。学生を「コンフォートゾーン」から抜け出させるため、ランダムにグループ分けし (受講者数に応じて各グループに 2 ~ 4 人)、グループごとに東京都内の区をランダムに選んでもらいました (区の名前が記載されたカードを、見えないように選ばせています)。もちろん、東京都のみでは日本を語りきることはできないことは重々承知していますが、この試みを通じて、少なくとも割り当てられた場所について知ることができます。学生が作成するコンテンツは章に分かれており、経済、歴史、芸術 (広義の意味)、そして社会と文化という幅広いテーマに焦点を当てています。学生たちにはそれぞれ担当する章が割り当てられ、序章および結論はグループで一緒に作成します。

また文章に加えて、キャンパス内のアップルコンピュータラボで利用可能 (または App Store から無料で入手可能) な iBooks ソフトウェアを使用

することで、画像、ビデオ、インタラクティブマップなどを埋め込み、担当している区の多様性を強調することが可能です。このアプローチにより、通常とは異なる方法でお互いに知識と経験を共有できると感じています。さらに、学生達はこの成果物が多くの人の目に触れることを理解しているため、完成度の高いものを作ることに注力します。同様に、盗作や倫理的研究などの問題も、より意識しているように感じました。

この iBooks プロジェクトはこれまでも何回か行ってきましたが、今年の春に行ったコースでは PechaKucha ビデオ (www.pechakucha.org) という、もう 1 つのテクノロジー的な要素も取り入れました。PechaKucha ビデオはクイックプレゼンテーションのアイデアに基づいており、20 秒ごとに切り替わる画像スライドを使用します。今回のプロジェクトは、Kenyon College (グローバルリベラルアーツ提携校の一つ、以下 GLAA) の教授と一緒に行いました。授業では、アジア研究の授業で彼の学生たちが作成した PechaKucha ビデオをシェアしてもらった後に、こちらの学生たちが日本に関する様々な要素を紹介しました。紹介した内容は「日本文化に関する指導」から「ゆるキャラ」、「巣鴨：高齢化社会の原宿」まで、数多くのテーマを幅広く取り上げました。その後、PechaKucha ビデオを学校間で共有しました。ここでは、プレゼンテーションの内容に対するコメントを送り、その後各自で振り返りを行ったり、また作品に対するフィードバックを直接送り合いました。

この PechaKucha ビデオを使った課題の準備を整えるにあたって、学期の開始前、およびこのプロジェクト期間中は、Center for Teaching and Learning (CTL) と共に準備をすすめました。学期が始まる前に、学生にどのような指示を与えればいいのか、またこの課題を行うのにどれほどの時間を要するのかについて話し合いました。まず始めに、学生たちに PechaKucha ビデオの作り方を教える動画を事前に見せ、次にアメリカの学校の PechaKucha ビデオを見せることで授業を「反転」させました。こうすることで、授業中の時間を実際にプロジェクトに取り組むためにより効果的に

活用することができます。

このアサイメントはペアで行われ、学生はそれぞれ 10 枚のスライドとそれに対応するナレーションを担当しました。このプレゼンテーションに合わせたナレーションの録音も、CTL のスタッフの協力のもと行われました。音声を録音することにより、通常教室で出会うようなオーディエンス以外の人に対して、異なる形式のプレゼンテーションを行うことができるようになります。

今回のプロジェクトは日本研究のクラスで行いましたが、様々なカリキュラムのどんなクラスにおいても簡単に応用することができると思います。iBooks プロジェクトは、紙ベースの課題のもう一つの形ですが、学生が情報を収集して共有する上で、より高度な創造性が求められる課題です。PechaKucha プロジェクトもまた、学生にプレゼンテーションを行わせる斬新な方法でした。今回は別の GLAA 機関と合同で行いましたが、独立した授業でも行うことができると思っています。

さて、ここでこれらの試みにおけるいくつかの課題について言及したいと思います。この iBooks プロジェクトでは、コンピュータを使った作業を必要とします。（これまで授業中にコンピュータラボを利用せず、とてもやりにくかったことがあります）また、コンピュータラボでは iBooks Author (iBooks の作成に使用されるプログラム) を使用できるにも関わらず、校内のラボから iBooks を公開できるようプログラムを更新することはできないようでした。このため、作品を公開するには所有している Apple コンピュータ (ソフトウェアが Apple のみに対応しているため) から行う必要がありました。このソフトウェアは App Store から無料でダウンロードできるのですが、前述の通り、ICU のコンピュータラボではインストールされているソフトウェアを更新することができないため、プロジェクトをラボ内で完結することができませんでした。PechaKucha プロジェクトにおける共同作業については、共同のためにより多くの作業時間が取れる秋学期に行うことをお勧めします。また、大学歴は学校ごとに異なるため、他の大学が学年を終える前に、学期の最初の数週間でこのプロジェクトをやり遂げなければなりませんでした。

(日本語訳 : CTL)

編集後記

2017年9月には新しく5名の先生方が着任され、そして新たなFDプログラムが始まりました。

今回の特集記事は、そのFDプログラムについて、プロジェクト開発のリーダーである鄭仁星先生にご執筆いただきました。そして5名の先生方の自己紹介もぜひご一読ください。

まずは充実した10週間のプログラムが終わりほっとしているところです。プロジェクトメンバーの先生方、リサーチアシスタントのみなさん、ファシリテーターとしてご協力いただきました先生方、ありがとうございました。今後はCTLが引き継ぎがさせていただきますが、次回以降も多くの先生方にご協力いただかなければこのプログラムは成り立ちません。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

オックスフォード大学のEMIには今回お二人目の参加ですが、今年の夏(8月)にICUでこのプログラムを行う予定で準備を進めていますので、ご期待ください。

チュートリアル実践報告は、今年度試験的に運用を行っている「CTLチューター」についてのご紹介です。今後のTA制度や学修支援のあり方を考えていく上でのご参考となればと思います。

今回もたくさんのご投稿をありがとうございました。

記事またはCTLに関するご意見、ご感想などありましたらお気軽に、ctl@icu.ac.jpまでお寄せください。ニュースレターへのご投稿ももちろんお待ちしております。

小林 智子
学修・教育センター